

与謝野晶子訳

源氏物語 夢の浮橋巻



一冊堂青空文庫

源氏物語

夢の浮橋

紫式部

與謝野晶子訳

明けくれに昔こひしきころもて生く

る世もはたゆめのうきはし　（晶子）

薰^{かおる}は山^{えんりやくじ}の延暦寺に着いて、常のとおりに経巻と仏像の供養を営んだ。
横川^{よかわ}の寺へは翌日行つたのであるが、僧都^{そうず}は大将の親しい

来駕^{らいが}を喜んで迎えた。これまでからも祈禱^{きとう}に關した用でつきあつていたのであるが、特に親しいという間柄にはなつていなかったところが、今度の一品^{いっぽん}の宮^{みや}の御病氣の際に、この僧都が修法を申し上げて著るしい効果を上げたのを見た時から、大きな尊敬を払うようになつて、以前に増した交情を生じたために、重々しい身でわざわざこの山寺へ訪ねて来てくれたとしてあらんかぎりの歡^{もて}待^{なし}をした。ゆるりと落ち着いて話などをしている客に湯漬^{ゆづ}けなどが出された。あたりのやや静かになつたころ、

「小野の辺にお知り合いの所がありますか」
と薫は尋ねた。

「そうです。それは古くなった家なのでございます。私に朽尼くちあまとも申すべき母がありまして、京にたいした邸やしきがあるのでありませんから、私が寺にこもっております間は、近くに来ておれば夜中でも暁でも何かの時に私が役だつことになるかと思ひまして小野に住ませてあるのでございます」

「あの辺は近年まで住宅も相応にあつたそうですが、このごろは家が少なくなつたそうですね」

と言つたあとで、薫は座を進めて低い声になり、

「確かなこととも思われませんし、またあなたへお尋ねしましては、なぜ私がそれを深く知ろうとするのかと不思議に思ひにな

るであろうしとはばかりされるのですが、その山里のお家うちで私に係のある人がお世話になっているということを聞きましたが、事実であるとすれば、そうなるまでの経路などもお話し申しておきたいと考えていましたうちに、あなたのお弟子にしていただいて尼の戒を授けられたということが伝わってきましたが、真実でしょうか。まだ年も若くて親などもある人ですから、私の行き届かない所からなくしたように恨まれてもしかたのない人なのですから」

と薫は言った。僧都は予期のとおりあの人はずただの家の娘ではなかった。貴女きじよであろうとは初めから考えられたことであつた。

自身で来てこれほどに言っておられる人であれば、深く愛された人に違いないと思うと、自分は僧であるにせよ、あまりに分別なくあの人の望みにまかせて出家をさせてしまったものであると胸がふさがり、返辞をどうすれば障りなく聞こえるであろうと考えられるのであった。事実をもう皆知っておられるらしい、これだけのことがすでにわかっている上で、探りにかかれては何も何も暴露してしまうはずである、隠してはかえって迷惑が起ころであらうという結論を僧都は得て、

「どういうことでこんなことが起こりましたかと、昨年来不思議にばかり思われていました方のことかと思われます」

と言ひ、

「小野の母と妹の尼が初瀬寺に願がございまして参詣いたしました歸りに宇治の院という所に休んでおりますうちに、母の尼が旅疲れで発病いたしまして、重そうに見えると申すしらせが私の所へあつたものですから、私も宇治へ出かけたのです。そうしますとあちらで不思議なことが起こつたと言ひだしまして、母の介抱もさしおきまして、妹の尼はどうしてもこの方の命を助けたいと騒ぎ出しました。その若い病人も死人同様になつていましたがさすがに呼吸はあつたのですから、昔の小説の殯殿に置いた死骸が蘇生したという話を妹は思い出しまして、そんなことかと私の弟

子の中の祈祷きとうの上手じょうずな僧を呼び寄せましてかわるがわる加持をさせなどしておりました。私は、惜しむべき年齢としではないのですが、旅の途中で病みました母に、正念に念仏もさせて終わらせたいと仏のお助けを乞こうておりましてその人のほうはくわしく見ませんでした。何がそうさせていたかと思ってみますと、天狗てんぐ、木こだ精まなどというものが欺あいて伴ともって来たものらしく解釈がされま
す。助けて京へ伴ともって来ましたあとも三月くらいは死んだ人と変わらぬようだったのですが、以前の衛門督えもんのかみの妻でございました私の妹の尼は、一人より持もっておりませんでした女の子をなくしましてから時はたっても、悲しみに沈しづんでおりましたのが、同じほ

としかつこう

どの年恰好ではありましたが、非常に美しい人でもある人を拾う
ことのできましたのは、観音が自分へ下すったのだと言って喜び
まして、気も狂わんばかりに私へこの人の命を救えと頼むもので
すから、私も坂本^{さかもと}へ下ってまいり、その時は私自身で祈禱をし、
護身法も行なってあげました。それから失心状態でも放心状態
でもなくなり、次第によろしくなられたのでございますが、自身
ではまだ憑かれたものの離れてしまわない気がする、これに妨げ
られずに未来の世界を思うようになりたいと私へ悲しいお話が
あったものですから、出家は自分のほうからお勧めもしたいこと
であるからと申して授戒を行なわせてさしあげたのでございま

す。あなたに御関係のある方などとは、空では悟りようもありませんでした。不思議な出来事なのですから、人にも話せば捜しておいでになる方の注意を引くことになったかもしれないのですが、世間に聞こえては煩わしいことになるであろうと申して、妹の尼はそれをとめましたので、長く秘密にいたしてまいったのでございます」

こう物語った。いよいよ事実であつたのかと薫は、小宰相から少し聞いた話から山へまで遠く僧都を尋ねて来たのではあるが、全然死んだと思っていた人が、確かにこの世に存在していたのかという驚きをまたも覚えて、夢の中の気持ちがい、心の打たれた

ことによって涙ぐまれるのを、高僧を前に置いてこんな弱さを見せるものでないと反省され、冷静なふうを作っていたが僧都には、薫の感じていることがわかり、これほどにも愛していた人を、生きていても死んだのと同じような尼の身に自分はしてしまったと過失をした気になり、罪を作ったという自責も覚えて、

「悪いものに魅^み入^いられになったということも前生の約束事なのですよ。必ず高い家の子でおりになったのでしよう。前生のどんなあやまちでさすらいの身などにおなりになったのでしうか」と僧都は問うてみた。

「王族の端とまあいうほどの人です。私も妻として結婚をしたの

ではありません。あることが動機になって恋愛がそこへまで進んでしまった間柄でした。がしかし、そんなにまで人の好意にすがって養われねばならぬような待遇を私はしていたのではありませんのに、不思議に跡かたもなくなってしまったものですから、身を投げたかなどと、それによってまたいろいろな想像もしていたわけです。罪の軽くなる御処置をお取りくだすったのですから、安心のできたことと私は思うのですが、母親である人が非常に恋しがり悲しがっておりますから、それだけには知らせてもやりたく思いますものの、その結果長く隠しておいでのになりました尼様の御本意に違い、断ち切れぬ親子の情で訪ねて行ったりする

ことになるかもしれぬと思われます」

などと薫は言つたあとで、

「御迷惑なことをと思いますが、その坂本までいっしょにお下りくださいませんでしょうか。細かい事実を承ることができましたあとで、なおそのまま捨てておいてよい人では初めからなかったのですから、夢のようなことを、この話を承つた時を機としても話し合いたいと私は思うのです」

こう言う様子に、その人を深く思うことのうかがわれるため、出家遁世とんせいの姿になり、髪も髭ひげも剃そつた僧たちでさえ恋愛の心のおさえられぬ者があるのである、まして女というものに戒行が保て

るものかどうかあぶないものである、かえって罪に墮おとすことに自分
は携たづなわってしまったと僧都は煩悶はんもんした。そして、

「下山しますことは今日明日さしつかえます。日が変わりました
らまいりまして、あちらからお手紙をお差し上げになるように計
らいましょう」

こう答えた。薫はたよりない気もするのであったが、ぜひなど
とすることは、にわかにあせりだしたことに見られて恥ずかし
いと思い、それではと言って帰ろうとした。姫君の異父弟は供の
中にいた。他の兄弟よりも美しいその子を大将は近くへ呼んで、
「これがその人と近い身内の者です。この少年をせめて使いに出

しましょう、短いお手紙を一つお書きください。私とは初めからお言いにならずに、だれか尋ね求めている人があるということをお書きください」

と薫が言っていると、

「そのお手引きをいたすことで私は必ず罪に堕おちましょう。事実
は申し上げたとおりです。もうあなたが今すぐお寄りになって、
お話しになることをお話しになる、それは何の罪にもあなたのお
なりになることはありません」

僧都はこう言うのであった。薫は笑って、

「あなたの罪になるようなお手引きを願ったと取っておいにな

るのは誤解ですよ。私は今日まで俗の姿でありますだけでも怪しいほど信仰を深く持つ男です。少年の時代から遁世の志を持っているのですが、三条の宮様がお一人きりで、私のような者一人をたよりに思召すのが断ち切れぬ絆きずなになりました、そのまま今も世に交わっておりますうちに自然に位などというものも高くなり、自身の意志にかなった生活もできないことになりますと、心は仏の道に傾きながら、行為は罪になるほうへ引かれても行っておりましたが、それは公私のやむをえぬことに生じた枝葉ともいうべきことです。そのほかではこれは仏の戒めであると教えられましたことは、いささかのこともそれに触れたくないとか心がけ、慎ん

でいまして、心の中は僧に変わりはないと信じる私です。ましてそれは不善のはなはだしいものですから、どうして道にはいった人を誘惑したりすることをしましょう。お信じください。ただ逢いまして気の毒な母親の話などをよくしてやりますことができれば私の心が楽になることと思うからです」

と、昔から仏の教えを奉じることの深さを薫^{かおる}は告げた。僧都^{そうず}も道理であるとうなずき、尊い心がけであることをほめなどするうちに日も暮れたため、中宿りに小野へ寄ることはふさわしい道順であると薫は思ったが、突然に行くのはやはりよろしくなからうと考え、帰ることにきめた時、この常陸^{ひたち}の子を僧都は愛らしいと

ほめた。

「この少年に持たせてやります手紙に彼女の昔の知人のことをほのめかしておいてください」

と薫が言ったので、僧都はさっそく手紙を書いた。

「ときどきは山へも登って来て遊んで行きなさい。私にあなたは縁がないのでもないからね」

などとも言った。少年は縁のあるという理由がわからないのであるが、手紙を受け取ってすぐに供の中へまじった。

坂本へ近くなった所で、

「前駆の者は列を分かれ分かれにして声も低くして行くように」

と大將は注意した。

小野では深く繁しげった夏山に向かい、流れの蛍ほたるだけを昔に似たものと慰めに見ている浮舟うきふねの姫君であつたが、軒の間から見える山の傾斜の道をたくさんたいまつの炬火が続いておりて来るのを見るために尼たちは縁の端へ出ていた。

「どなたがお通りになるのでしょうか。前駆の人がたくさんように見えますね。昼間横川よかわの方へ海布めの引乾ひきぼしを差し上げた時に、大將さんがおいでになって、にわかきょつおうに饗応したくの仕度しどをしている時で、いいおりだったというお返事がありましたよ」

「大將さんというのは今の女二にょにの宮みやのたしか御良人ごりようじんでいらつしや

る方ですね」

などと言っているのも、世間に通じない田舎いなかめいたことであつた。

あの人たちが言うように実際大將が通るのであるかと浮舟が思っている時に、かつてこれに似た山路やまみちを薫の通つて来たころ、特色のある声を出した随身の声が他の声にまじつて聞こえてきた。月日が過ぎれば過ぎるほど昔を恋しく思つたりすることは何にもならぬむだなことであると情けなく姫君は思い、阿弥陀仏あみだぶつを讃仰さんごうすることに紛らせ、平生よりも物数を言わずにいた。

薫は常陸の子を帰途にすぐ小野の家へやろうと思つたのである

が、従えている人の多いために避けて邸^{やしき}へ帰り、翌朝になつてから僧都の手紙を持たせてやることにして、きわめて親しく思う人で、おおぎようにならぬもの二、三人だけを付け、昔も宇治の使いをよくさせた隨身も添えてやるのであつた。聞く人のない時に、その子を薫はそばへ呼んで、

「おまえの亡くなつた姉様の顔は覚えてるか、もう死んだ人だとあきらめていたのだが、確かに生きていられるのだよ。ほかの人たちには知らしたくないと思つているのだから、おまえが行つて逢つて来るがいい。母にはまだ今のうちは言わないほうがいい。驚いて大騒ぎをするだろうから、そんなことはかえつて知ら

ない人にまでいろいろなことを知らせてしまうことになるよ。母の悲しみを思っ
て私はあの人を捜し出すのにこんなに骨を折っているのだ。ある時までは口外するな」

といましめるのを聞いて、子供心にも、兄弟は多いが上の姫君の美に及ぶ人はだれもないと思い込んでいたところが、死んでしまったと聞き非常に悲しいことであるといつもいつも思っているのに、こんなうれしい話を知ったのであるから感激して涙もこぼれてくるのを、恥ずかしいと思い、

「はあい」

と荒々しい声を出して紛らした。

小野の家へはまだ早朝に僧都の所から、

昨夜大将のお使いで小君^{こぎみ}がおいでになりましたか。お家のことなどくわしいお話を伺^{ほうぜん}って茫然となり、恐縮しておりますと姫君に申し上げてください。私自身がまいって申し上げたいこともたくさんあるのですが、今日明日を過ぎてから伺います。

こんな手紙が尼君へ来た。驚いて姫君の所へ持って来て見せるとその人は顔を赤くして、自分のことが明らかに知れてしまったのであるうか、物隠しをし続けたと尼君に恨まれてもしかたのない義理の立たぬことであると思うと、返辞のしようもなくそのまま黙っていると、

「今でもいいのですから言ってください。恨めしいお心ですね、私に隔てをお持ちになって」

と恨めしがるのであるが、何がどうであるかの理解はまだできないで、尼君はただわくわくとしているうちに、

「山の僧都のお手紙を持っておいでになった方があります」

と女房がしらせに来た。怪しく尼君は思うのであるが、今度のがものを分明にしてくれる兄の手紙であろう、使いでもあらうと思ひ、

「こちらへ」

と言わせると、きれいなきやしやな姿で美装した童^{わらべ}が縁を歩い

て来た。円座を出すと、御簾みすの所へ膝ひざをついて、

「こんなふうなお取り扱いは受けないでいいように僧都はおっしゃったのでしたが」

その子はこう言った。尼君が自身で応接に出た。持参された僧都の手紙を受け取って見ると、入道の姫君の御方へ、山よりとして署名が正しくしてあった。

まちがいではないかということもできぬ気がして姫君は奥のほうへ引っ込んで、人に顔も見合わせない。平生も晴れ晴れしくふるまう人ではないが、こんなふうであるために、

「どうしたことでしょう」

などと言い、尼君が僧都の手紙を開いて読むと、

今朝けさこの寺へ右大将殿がおいでになりました、あなたのことをお聞きになりましたため、初めからのことをくわしく皆お話しいたしました。深い相思の人をお置きになって、いやしい人たちの中にまじり、出家をされましたことは、かえって仏がお責めになるべきことであるのを、お話から承知し、驚いております。しかたのないことです。もとの夫婦の道へお帰りになつて、一方が作る愛執の念を晴らさせておあげになり、なお一日の出家の功德は無量とされているのですから、もとに帰られたあとも御仏をおたよりになされるがよろしいと私は申し上げま

す。いろいろのことはまた自身でまいて申し上げましょう。また十分ではなくてもこの小君が今日のことをあなたに通じてくださるかと思っています。

「#ここで1字下げ終わり」

書面を見れば事が明瞭めいりょうになるはずであっても、姫君のほかの人はまだわけがわからぬとばかり思っていた。

「あの小君は何にあたる方ですか、恨めしい方、今になってもお隠しなさるのね」

と尼君に責められて、少し外のほうを向いて見ると、来た小君は自殺の決心をした夕べにも恋しく思われた弟であった。同

じ家にいたころはまだわんぱくで、両親の愛におごっていて、憎らしいところもあったが、母が非常に愛していて、宇治へもときどきつれて来たので、そのうち少し大きくもなっていて双方で姉弟きょうだいの愛を感じ合うようになっていた子であると思い出してさえ夢のようにばかり浮舟には思われた。何よりも母がどうしているかと聞きたく思われるのであった。他の人々のことは近ごろになってだれからともなく噂うわさが耳にはいるのであったが、母の消息はほのかにすらも知ることができなかつたと思うと、弟を見たことでいっそう悲しくなり、ほろほろ涙をこぼして姫君は泣いた。小君は美しくて少し似たところもあるように

他人の目には思われるのであったから、

「御姉弟きょうだいなのでしよう。お話ししたく思っていていらっしやることもあるでしょうから、座敷の中へお通ししましょう」

と尼君が言う。それには及ばぬ、もう自分は死んだものとだれも思ってしまったのであろうのに、今さら尼という変わった姿になって、身内の者に逢うのは恥ずかしいと浮舟は思い、しばらく黙っていたあとで、

「身の上をくらましておきますために、いろいろなことを言うかとお思になるのが恥ずかしくて、何もこれまでは申されなかったのですよ。想像もできませんような生きた屍しかばねになってお

りました私を、御覧になったのはあなたですが、どんなに醜いことだったでしょう。私の無感覚で久しくおりましたうちに精神というものもどうなってしまったのですか、過去のこととは自身のことでありながら思い出せないでいますうち、紀伊守とおきいのかみ言いになる人が世間話をしておいでになったうちに、私の身上ではないかとほのかに記憶の呼び返されることがございました。それからのちにいろいろと考えてみましても、はかばかしく心によみがえってくる事実はないのですが、私のために一人の親であつた母は今どうしておられるだろうとそればかりは始終思われて恋しくも悲しくもなるのでしたが、今日見ますと、

この少年は小さい時に見た顔のように思われまして、それによつて忍びがたい気持ちはしますが、そんな人たちにも私の生きてゐることは知られたくないと思いますから、逢わないことにしたいと思います。もし生きておりましたならば今申しました母にだけは逢いとうございます。僧都様そうずが手紙にお書きになりました人などには断然私はいないことにしてしまいたいと思うのでございます。なんとか上手じょうずにお言いくだすつて、まちがいだったというようにおつしゃつて、お隠しくださいませ」

と浮舟の姫君は言つた。

「むずかしいことだと思ひますね。僧都さんの性質は僧という

ものはそんなものであるという以上に公明正大なのですからね、もう何の虚偽もまじらぬお話をお伝えしてしまいなすつたでしょうよ。隠そうとしましてもほかからずんずん事実が証明されてゆきますよ。それに御身分が並み並みのお姫様ではないらっしゃらないのだし」

この尼君から聞き、姫君が女王様であつたによおうということにだれも興奮していて、

「ひどく気のお強いことになりますから」

皆で言い合わせて浮舟のいる室へやとの間に几帳きちょうを立てて少年を座敷に導いた。この子も姉君は生きているのだと聞かされてき

ているが、姉弟らしくものを言いかけるのに羞恥しゆうちも覚えて、

「もう一つ別なお手紙も持って来ているのですが、僧都のお言葉によってすべてが明らかになっていきますのに、どうしてこんなに白々しくお扱いになりますか」

とだけ伏し目になって言った。

「まあ御覧なさい、かわいらしい方ね」

などと尼君は女房に言い、

「お手紙を御覧になる方はここにいらっしゃるとまあ申してよいのですよ。こうしてあつかましく出ていますわれわれはまだ何がどうであつたのかも理解できないでおります。だからあな

たから私たちに話してください。小さい方をこうしたお使いにお選びになりましたのにはわけもあることでしょう」

と少年に言った。

「知らない者のようにお扱いになる方の所ではお話のしようもありません。お愛しくださなくなった私からはもう何も申し上げません。ただこのお手紙は人づてでなく差し上げるようにと仰せつけられて来たのですから、ぜひ手ずからお渡しさせていただきます」

こう小君が言うと、

「もっともじゃありませんか、そんなに意地をかたく張るもの

ではありませんよ。あなたは優しい方なのに、一方では手のつけられぬ方ですね」

と尼君は言い、いろいろに言葉を変えて勧め、几帳のきわへ押し寄せたのを知らず知らずそのままになってすわっている人の様子が、他人でないことは直感されるために、そこへ手紙を差し入れた。

「お返事を早くいただいて帰りたいと思います」

うといふうを見せられることが恨めしく、少年は急ぐように言う。尼君は大将の手紙を解いて姫君に見せるのであった。昔のままの手跡で、紙のにおいは並みはずれなまでに高い。ほの

かにのぞき見をして風流好きな尼君は美しいものと思った。

尼におなりになったという、なんとも言いようのない、私にとってには罪なお心も、僧都の高潔な心に逢って、私もお許しする気になって、そのことにはもう触れずに、過去のあの時の悲しみがどんなものであったかということだけでも話し合いたいとあせる心はわれながらもあき足らず見えます。まして他人の目にはどんなふうに映るでしょう。

と書きも終わっていないで次の歌がある。

法の師を訪ぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

この人をお見忘れになったでしょうか。私は行くえを失った方の形見にそば近く置いて慰めにながめている少年です。

とも書かれてあった。こう詳細に知って書いてある人に存在の紛らしようもない自分ではないか、そうかといってその人にも、願わぬことにもかかわらず変わった姿を見つけられた時の恥ずかしさはどうであろうと浮舟うきふねは煩悶して、もともと弱々しい性質のこの人はなすことも知らないふうになっていた。さすがに泣いてひれ伏したままになっているのを、

「あまりに並みをはずれた御様子ね」

と言ひ、尼君は困っていた。どうお返事を言えいいのかと責

められて、

「今は心がかき乱されています。少し冷静になりましたから返事をいたしましょう。昔のことを思い出しましても少しもお話するようなことは見いだせません。ですから落ち着きましたらこのお手紙の心のわかることがあるかもしれません。今日はこのまま持ってお帰してください。ひよつとただく人が違っていたりしては片腹痛いではございませんか」

と姫君は言い、手紙はひろ拡げたままで尼君のほうへ押しやった。

「それでは困るではありませんか。あまりに失礼な態度をお見せになるのでは、そばにいる人も申しわけがありません」

多くの言葉でこんなことの言われるのも不快で、顔までも上に着た物の中へ引き入れて浮舟は寝ていた。

主人の尼君は少年の話し相手に出て、

「物怪もののけの仕業しわざでしょうね。普通のふうにお見えになる時もなく、始終御病氣続きでね。それで落飾もなすったのを、御縁のある方が訪ねておいでになった時に、これでは申しわけがないとそばにいて気をもんでおりましたとおりに、大将さんの奥様でありになつたのでございますってね。それをはじめて承知いたしました。て、なんともお詫わびのしかたもないように思います。ずっと御気分は晴れ晴れしくないのですが、思いがけぬ御消息のございました

たことでまたお心も乱れるのでしょう。平生以上に今日はお気むずかしくなっていらっしゃるようですよ」

などと語っていた。山里相応な饗応きやうおうをするのであったが、少年の心は落ち着かぬらしかった。

「私がお使いに選ばれて来ましたことに対しても何かひと言だけは言ってくださいませんか」

「ほんとうに」

と言い、それを伝えたが、姫君はものも言われないふうであるのに、尼君は失望して、

「ただこんなようにたよりないふうでおいでになったと御報告を

なさるほかはありますまい。はるかに雲が隔てるというほどの山でもないのですから、山風は吹きましてもまた必ずお立ち寄りくださるでしょう」

と小君^{こぎみ}に言った。期待もなしに長くとどまっていることもよろしくないと思つて少年は去ろうとした。恋しい姿の姉に再会する喜びを心にいだいて来たのであつたから、落胆して大将邸へまいった。

大将は少年の歸りを今か今かと思つて待つていたのであつたが、こうした要領を得ないふうで歸つて来たのに失望し、その人のために持つ悲しみはかえつて深められた気がして、いろいろな

ことも想像されるのであった。だれかがひそかに恋人として置いてあるのではあるまいかなどと、あのころ恨めしいあまりに軽蔑^{けいべつ}してもみた人であったから、その習慣で自身でもよけいなことを思うとまで思われた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
